

**588**

**2005 6月**

塗り壁の文化誌

「錢塘」地名の縁

平成17年6月10日発行  
毎月1回10日発行  
昭和31年9月18日  
第3種郵便物認可

# 左官教室



特集

## 「錢塘」地名の縁

井上忠久

●塗り壁技術資料

高貴にして温潤な黒——無限世界の切り口

弧島慧快

## 高貴にして温潤な黒 — 無限世界の切り口

多羅尾氏の大津磨きを寺院建築に生かす

建築家  
弧島慧快

福島県郡山市の如宝寺というお寺で不動堂の設計をした時のこと。本尊不動明王の背後の壁をどのような仕上げにしたら良いか悩んでいた。

宗教建築の空間には、日常的な相対世界を越えた「無限の世界」を暗示する雰囲気がなくてはならない。

その「無限」とは、一切の存在がその終わりの時に、その中にのみ込まれて帰り行く「無限」であると同時に、一切の存在がそこから生み出され、その活動を一瞬の休みもなく支え続けている「無限」である。

寺院建築の核心部分に当たる内陣の空間は、そこに「無限世界」の切り口がのぞいている特異なエリアとして形成すべきだと思っている。

如宝寺不動堂の場合、本尊のまっ黒な不動明王像を、「無限世界」からこの相対世界におどり出して来た特異者として位置づける空間を構想した。

その具体的な方法として、不動尊像

の背後の壁面を、不動尊を胚胎せしめた「無限世界」の切り口であるような壁にできないものかと考えたのだが、どのような仕上げにしたらよいかわからなかった。そんな時、本誌に磯村雅子氏によって多羅尾氏の黒磨き壁が紹介されていた。そこでその実物をどうしても見なければという思いにかられ、多羅尾氏にお願いして伊賀上野の山中にその住宅を訪ねた。

その黒壁は、磯村氏が書かれた通り、まつたりとしたつやを放つ、高貴にして温潤な黒で、「面」の存在感と共に、「面」の背後に空間の深い奥行きを感じさせる黒壁であった。早速に多羅尾氏にお願いして郡山まで行って頂くことにした。

不動堂は小さなお堂ではあったが、住宅建築には無い切れ目無き広い壁面で、多羅尾氏にとっても未経験の広さであったと言われた。柱や枠を設けて、ひとつづきの壁面を手頃な広さに区切



大津の黒磨きがおこなわれた聖天堂の内陣



ネル掛けをする多羅尾さん



高貴にしてしっとりとした黒磨き壁



伊賀上野で鉄壁といわれる黒の大津磨きの肌。

れば、左官工事が容易になるし、仕上げの質も安定的に良くできることはわかつっていた。

しかし、その壁は無限世界の切り口である。壁の中に区切りの柱や枠を設けると、無限空間の中の檻の格子のようになりはしないかと思えたので、区切ることは止めにした。

でき上ってみれば、多羅尾氏にとっても、住宅の真壁のスケールにはなかったご苦労がしのばれはするものの、設計の狙いは見事に生かされて、無限世界の切り口をつくり出したいという思いがわいていた

四国・普通寺の聖天堂では、郡山の不動堂の壁より2.5倍も広い、切れ目なき大壁をつくり、これを多羅尾氏にお願いした。さぞかしご苦心されたことであろう。

普通寺に出現した黒壁は、住宅スケールで見られたものとは趣きを異にする。高貴で温潤で神秘的な黒には違いないが、面の背後に潜む無限世界の荒々しい力も暗示させている。聖天という神様は、もとはとんでもない悪神で、人々を恐怖させ苦しめていたが、十一面觀音の教化によって心を入れ替え、人々に現世の福德をさずける役割



黒の大津磨きがおこなわれた聖天堂

を負うことになった、強力で個性的な神である。

その強力で生きしい現世利益の働きを反映させてか、聖天に祈るための仏具類には、全て朱と金が用いられる。それらの朱と金の莊嚴がこの黒壁に囲まれた中に置かれた時の特別な空間を、私はずっと思い描いていた。あとは、この黒磨きを生かせるかどうか、仏具屋さんの成果を待つ他ない。

私は、宗教建築の特異なエリアだからといって、オドロオドロしい空間は好まない。人の知性も理性も曇らせてしまいそうな異界の質は、本来仏教とは相入れない。

ともすればオドロオドロしくなってしまいそうな聖天信仰の空間を、清潔で高貴な黒壁が救って、どこかにキリ

りとした雰囲気ができるることを期待している。

多羅尾氏には、更にご苦労をおかけすることになるかも知れないが、この次にはもっと大きな壁面と、天井までこの黒磨きを施した空間を造れないものかと思っている。ただし、今度は、全く見切りを設けない面ではなく、見切りを設けながらも無限世界の切り口をさまたげないようにする設計上の工夫をしなければならないだろう。もっとも、そのような空間を造れる設計依頼が来てくれた…という話だが。

筆者／日本建築家協会会員・真言宗豊山派太陽寺住職・こじまえかい

## 聖天堂の大津磨きの材料と技法

多羅尾充男  
(タラオ左官工業代表)

四国八十八ヶ所霊場巡り75番札所、真言宗善通寺派総本山善通寺（弘法大師誕生地）の創建1200年（平成18年）記念事業の一環として、聖天堂が再建され、今回聖天堂内陣の仕上壁を担当させていただくことになった。仕事のお話は、福島県郡山市如宝寺不動堂内部の大津黒磨き壁を施工当時より、設計をされた太陽寺設計工房主宰の弧島慧快先生より、依頼を受けていたのですが、図面を見て経験のない壁の大きさに、ただ「うまく仕上がるかな？」と思い描いていた。

昨年、元請会社の工程表をみていながら、材料の確認、調達、試し塗が練習も時間がとれず、仕上げがぶっつけ本番となってしまった。一人で1日に1坪半ぐらいの壁は経験があつても、今回は一人、二人では無理で、以前滋賀県守山市で開かれた大津磨き研究会

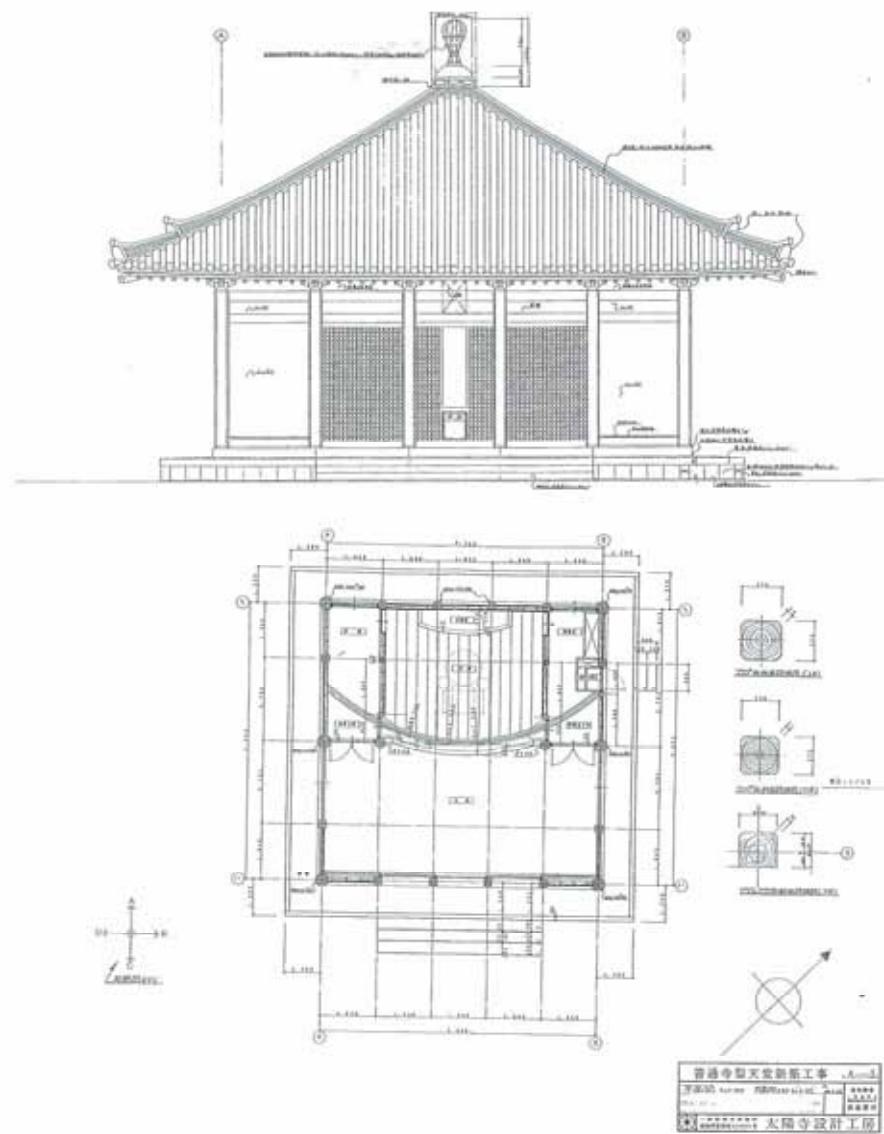
で知り合った久住誠君にお手伝いいただいた。

久住誠君と私共、左官職人谷中朗君、山本勝彦君と私とで4人がぶっつけ本番、試行錯誤の一週間の仕上げ期間であった。正面大壁の仕上日には京都から久住章さん、浅原雄三さんも見学に来られて、またお手伝いをいただいた、6人の合作として仕上ることが出来た。

平素は地元建材店で販売されている商品名「飛切印三笠墨」（膠で練り固めた墨）を使っていたのだが、今回、墨の色艶の良さと使い勝手も判断、田中石灰工業株の練墨「たなか本墨」と、近畿礫材工業株の城かべ松煙をブレンド使用、また、引土の浅葱土も三重の浅葱土と久住誠君が持参していただいた（久住章さんが調達してくれた）浅葱土をブレンドして使用してみた。

墨のブレンドで引土のこなしにおいて

●聖天堂の立面図と平面図





仕上げた壁を背に一同で記念写真。見学に来られた久住章さん、浅原さんと。前列右より、浅原雄三、多羅尾充男、久住章、後列右より、久住誠、谷中朗、山本勝彦の各氏

て、ハンドスプレーで霧吹き後、鎧の当たりが良かった点であるが、田中石灰工業㈱さんの「たなか本墨」の成分のためか、鎧の当たりの色ムラが出来、仕上げ面に残り、乾燥が終わってしまうまで消えず、気にかかった。

また、灰土を塗る前の壁への水打であるが、下地の塗り厚が30mm程度であったので、水打の量の差が仕上り面に影響が出やすかったし、4人で塗り付けるとそれぞれの塗り厚の違いも、水引き加減に微妙に差があり、影響が出た。私としては、善通寺聖天堂の工事に携わり、また一步技術的、精神的にステップアップ出来たかな?との感である。

### ●施工手順

(下地ラスボード)

①下塗り材料

B・Y N ブラスター+砂 (1:1)

荒土 (おろし土2袋+ワラスサ1袋+砂角スコ1)

B・Y N ブラスター下コスリ (ボーダー縦手メッシュ処理) の上、おっかけ荒土、下塗り2回。

※今回、荒土、中塗り土には、地元産販売名「おろし土」(株)前田煉瓦製造所香川県三豊郡仁尾町を使用

②中塗り材料

中土 (おろし土2袋+ワラスサ1袋+砂バケツ1杯) ・グラスマッシュ

中塗りは大壁であり、仕上げ面に絞り肌面を出すために、かなり軟らかめで2回塗り、全面グラスマッシュ伏せ



黒の磨き壁に使用した鎌とビロードの布団



ラスボード下地にB・YN プラスターを下こすり、継手にメッシュ伏せ込み

込み梨地で仕上げた。

※梨地下地中塗りの肌が、磨き壁仕上げ乾燥の段階で表面に絞り肌面として現れる。私はこの絞り肌面が何よりも気に入っている。

#### ③仕上げ・大津黒磨き

灰土。中塗り土を3厘目で篩、ミジンスサと練り合わせ1年半寝かせておいたものを使用。

A：練り合わせ中塗り土+石灰+白毛スサ（2：1：適量）

B：珪砂6号

A：B=2：1

#### ④引土m当り

石灰 30g

浅葱土（三重） 50g

浅葱土（久住さん持参） 50g

たなか本墨（田中石灰） 40g

城かべ松煙（近畿壁材） 15g

M C 0.5 g

紙スサ 少々多い目

チリ廻りをマスキングテープで養生、下地水打を洗い出し用ポンプで適量霧吹きし、灰土を施工2回掛け（伊賀地方では灰土のことを灰中という）灰土を良く伏せ込んでから、引土を2回掛け、少々厚い目。1、2度こなしを行ってから、今回ハンドスプレーによる霧吹きでの「もどし」作業をする。良く伏せ込みをしてからミガキ鎌が掛からなくなる手前ぐらいで最後プラスチック鎌で壁を通して押える。15~30分おいて、ネル掛け（今回久住誠さんの奥さんが作られたビロード布団を使用させていただいた）作業に入る。後は根気の作業。乾燥後、油拭きで完成。



中塗り。壁全面にメッシュを伏せ込む山本勝彦さん

B・YNブラスター下こすり後、ただちに中塗り土（地元おろし土）でおっかけ塗り、ホウキ目を入れる



ホウキ目を入れた中塗りの肌

灰土を塗り、伏せ込みをする久住章さん



中央塗に灰土を塗り伏せ込み



ノロ掛けし磨いたあとのビロード掛けする山本勝彦さん



ビロードで磨く谷中朗君



外部仕上げの古代漆喰と下塗り、中塗りに使った地元産おろし土とスサ



灰土づくり（伊賀地方では灰中という）



引土（黒ノロ）



黒の材料づくりをする久住誠さん



正面の大壁は全員で磨く